## 《町史だより》

## **※まちの秘話**②

各分野における調査過程の情報の一部をみなさまにお知らせします。

## ~三助狐のこと~

先日、小向のどんどにお邪魔したところ、「最近、狐が多なったね」という話をお聴きしました。そ こで申歳ではありますが、狐の話題をひとつ。昨年11月の塚本先生のご講演の中にも、角屋吉兵衛の書 いた『豊秋雑筆』(刊本名『桑名町人風聞記録Ⅰ』)に記された「三助狐」の話がありました。天保11 年(1840年)の時点で993歳にもなるという妖狐の話ですが、それが神主の代でいうと五世代ぶりとい いますから、100年以上の歳月を経て九州は日向から故郷の縄生に帰って来るというのです。どういう わけで日向へ出向いていたのか分かりませんが、全国に妖狐伝説は多々あれど、これほど広域の動きを する狐は珍しいといえます。そこで縄生では、三助狐のために城山の松の大木の根元に祠を建てたいと お上に願い出たところ、新たに宮地を設けるというのはまかりならんということで、天神宮(現苗代神 社)境内に祭ることになったというのですが、現在苗代神社境内に稲荷社は見当たりません。このこと も不思議ですが、他にも幾つか謎があります。実は「三助狐」というのは別の場所にも登場するのです。 同じく江戸時代の終り頃に編纂された『勢陽五鈴遺響』という本の、桑名「矢田城址」に「此山二三助 狐ト云アリテ城土(主の誤記だと思います)服部三助力邸舎ノ地二逕棲シテ今二怪ヲナス」とあるので す。矢田城というのは今の走井山勧学寺にあったとされる中世の城館です。縄生とは町屋川を挟んで向 かい合った、いわば指呼の間といってよい位置関係にありますから、同名の別狐と考えるよりは同じ狐 と考えた方がいいのではないでしょうか。だとするとこのことをどう捉えたらよいのか。また、縄生の 城山は、今では削平されて近鉄線とJRに挟まれた住宅地になっていますが、やはり中世城館があった 場所で、現在でも小字名として「城山」が残っています。つまり三助狐は城跡にゆかりがあることにな ります。このことは何を示しているのか。各地に伝わる妖狐伝説はバラエティに富んでいますが、城や 城跡にまつわるものはそれほど多くはありません。(県内ではあと一例、桑名城の本丸に白狐が棲んで いたが妙見社に遷ったと伝わっているぐらいです)。全国的な傾向についてはまだ調べていませんが、 例えば年配の方は宮本武蔵が姫路城に棲む化け物(尾が三つに割れた狐)を退治した話を講談絵本で読 んだ記憶があるでしょう。つまりある種の狐は城ないし城跡と浅からぬ因縁があるのです。こんなこと まで今回の町史で触れる余裕はないと思いますが、興味深いテーマの一つだと考えています。

以上は長い前置きです。現在走井山勧学寺には「お菊稲荷」がありますし、少し西の山麓には「玉宮稲荷」という比較的大きな稲荷社がありますが、三助狐との関係は分かりません。肝心の縄生に稲荷社は見当たらないことは既に述べましたが、お隣の小向神社の境内には「玉久稲荷」という稲荷社があります。二三の方に由来をお尋ねしましたが、今のところこれといった言い伝えはお聞きできないでいます。もしどなたかご存じの方がありましたらご教示下さい。お待ちしています。現在民俗部会では、昔の日常生活や冠婚葬祭、機械化以前の農業のことなどをお聴きしたり、神社やお寺で行われている行事を見せていただいていますが、こうした伝説や言い伝えも失われてしまう前に是非書き留めてまいりたいと思っています。なにとぞよろしくお願い致します。

記:町史専門委員・民俗部会 久志本鉄也